



研究室訪問

先端の通信技術を縁として、
心と心の交流を深める

インタビュー

夢中で走り続けたこの二十五年。
真の国際化実現のため、感謝の気持ちを胸に、
これからも力を尽くしていきたい

座談会

活発な留学生交流イベントが、
キャンパスの空気を変えていく

トピックス

- ・ エジプトのヘルワン大学と国際交流協定
- ・ 次世代型繊維科学をテーマに海外から研究者が集結
- ・ 視聴覚障がい者用体重計などをプレゼントしました



京都工芸繊維大学 国際交流センター

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町1番地
Tel:+81-75-724-7128 Fax:+81-75-724-7710
E-mail:ab7128@jim.kit.ac.jp
<http://www.kokusai.kit.ac.jp/japanese/>
<http://www.kit.ac.jp/>

先端の通信技術を縁として、 心と心の交流を深める

大学院工学部科学研究科 情報工学部門 教授
情報科学センター長

若杉 耕一郎

私がセンター長を務めている情報科学センターは、一九六七年の設立以来、各種の情報処理を行なうコンピュータ施設として運営されてきました。やがて、パーソナル・コンピュータの性能の著しい進化や、インターネット、キャンバスLANなどの普及によって、センターの役割は変化し、現在では、学内の情報インフラである「KINETE」の管理・運営を主体としながら、全学の情報基盤としての役割を担っています。

キャンバスLANは、一九九〇年頃から「草の根ネット」として整備が始まり、九五年に「KINETE」と名づけられました。以後、数年毎に設備を刷新して高速化を図り、嵯峨キャンバスを含めた全学ネットワークとして、今や研究活動に不可欠な存在となりました。

また私は、情報工学部門の教員として、情報通信に関する研究を行なっています。テーマは、「ブロードバンドワイヤレス

通信を実現するための時空間符号化通信」というもので、例えば劣悪な通信環境でも、その技術を用いれば、ブロードバンド通信を行なえるようになります。もう一つは、基地局なしで端末と端末が自律的にネットワークを形成する無線通信技術、いわゆる「アドホックネットワーク」の研究にも取り組んでいます。複数の端末が、ちょうど「パケットリレー」のようにデータを運ぶ技術のことで、こちらはベンチャー企業との共同研究も行いました。

通信やネットワークといった現代的なテーマをキーワードとしているため、私が受け持つ修士課程の学生たちの中に毎年一人か二人は留学生が含まれています。また、通常の学部の講義においても、留学生が受講している場合があるので、日常的に留学生と触れ合う機会を持っているといえるでしょう。彼らに教えていくうえでポイントとなるのは、日本語の

習熟度に個人差があるということと、短期間でかなりのレベルに達している人もいますが、中には修士課程が修了する間際まで、会話が少し通じにくい部分があったり、修士論文の日本語にも多少問題が残っていたりする人もいて、教員としての

対応の難しさを感じさせられます。しかし、それでも皆、卒業後はしっかりとした企業に就職し、活躍しているの、専門技術に関してはずいぶん習得してくれているものと考えています。

日本人学生にとって、高いモチベーションを持って研究に取り組む留学生の存在は、とてもいい刺激になっています。学問以外の面でも、例えば儒教の考え方が深く浸透している韓国やベトナムの留学生の生活姿勢を見て、何らかのカル

チャーギャップを感じ取ってくれば、日本人学生の精神的成長につながるはず。そうした意味でも、常に留学生がいる状態が理想的だと思えます。

もちろん留学生にとっては、研究だけでなく、京都という街で日本文化に触れ、自国との違いを肌で感じることもいい体験になるでしょう。今後も、留学生たちと良い関係を保っていききたいものです。



夢中で走り続けたこの二十五年。
真の国際化実現のため、感謝の気持ちを胸に、
これからも力を尽くしていきたい

国際企画課長

吉井 勉



厚生主任として業務に携わっていた三十五歳の折、たまたま留学生の宿舍の斡旋を任せられました。地域の下宿を訪ねて大家さんと交渉したのですが、このとき入居を断られるという予期せぬ状況に直面し、留学生への偏見や差別が存在することにショックを受けました。この出来事が契機となり、私は異文化理解と共に留学生世話業務にのめり込んでいくことになったのです。

翌年学生係長となり、同時に留学生の世話も任せられました。当時、政府の「留学生受入れ十万人計画」により本学の留学生数も増え、やればやるほど問題意識は膨らんでいきました。課題も山積しており、とても片手間でではできそうにないため、新たに留学生係長を設置すべく概要要求したところ、これが認められ、私は初代留学生係長となりました。すべてがゼロからのスタート。次々と噴出する問題に何とか留学生の手助けをしたい一心で無我夢中で取り組んでいるうち、通常なら二、三年で異動があるところが、なんと十年間も留学生係長を務めることになったのです。

宿舎問題と並んで大きな課題となったのは、医療問題でした。留学生は日本の高い医療費を払えず、当時は未だ国民健康保険にも入れなかったため、私は近隣の医療機関を訪ね、治療はもちろん、医療費にも融通を利かせてくれる医者を探して回ったものでした。後に、留学生の国民健康保険加入が可能となり更には加入が義務化されましたが、保険料の負担を軽くするため、京都市に補助金を出してもらおうという市議員と共に働きかけ、これが実現したときには本当に嬉しく思いました。

話は前後しますが、留学生係長になってしばらく経ってから、自分の語学力不足を痛感すると同時に、日本の留学生受け入れ態勢が、欧米に比べて相当立ち遅れていることに危機感を抱きました。そこで一念発起し、平日夜間や休日にごっそりと英語学校に通いながら英会話を学習し、フルブライト奨学金に応募したところ、幸いにも選考に通過し、四十歳で

アメリカに短期留学することになりました。海の向こうで留学生受け入れの実態を見聞したり、全米の留学生問題研究会のワーキングショップで意見発表したりできたのは、私にとって何ものにも代えがたい経験となったものです。帰国後、留学生受入れ先進国であるアメリカの実態を広く伝えるとともに、学生が教員の補助をする「ティーチング・アシスタント制度」の導入などに尽力しました。また、フルブライト・プログラムの経験を買われ、マスコミやJAFSA（国際教育交流協議会・当時は留学生問題研究会）を通して、討論会や書物で意見を述べる場を与えられるようになりました。

その後、京都大学・京都教育大学への転勤を経て、国立大学法人化と同時に本学に戻り、国際企画課長を任せられました。海外の諸大学との協定締結や、元留学生間のネットワーク作り、フオーローアップ業務など、懸案事項に邁進させていただいたことに対し、国際企画課員をはじめ関係者の方々にに対し、心の底から感謝する次第です。また、その昔お世話した留学生たちが、それぞれの母国で活躍され、彼らによる世界的ネットワークが形成されつつあるのもたいへん嬉しいことです。私はこの春、定年退職となりますが、本学の国際化のため、今後も微力ではありますが、出来る限りの協力は惜しまないつもりです。真の国際化に向けて、同志の方々の益々のご活躍を願ってやみません。

活発な留学生交流イベントが、 キャンパスの空気を変えていく

〜KIT国際交流サポートクラブの使命〜

▼座談会出席者▲

橋本麗奈 (ベンチャーラボラトリー非常勤研究員、元・まりこうじ会館チーター)

島袋 哲 (機械システム工学専攻修士二回生、留学生チーター)

張 慧 (機械システム工学専攻修士二回生、中国人留学生聯誼会会長)

KIT 国際交流サポートクラブ — KITICO — (KIT International Communication Organization)

KITの国際交流行事を、より開かれ、学生のニーズに合致したものにするため、企画段階から参加する学生やOB・OGの集まりとして、国際交流センター内に組織されました。様々なイベントを通して、日本人学生と留学生の一層の交流を図り、ひいては大学コミュニティ全体の国際性を高めることを目指して、留学生チューターや留学経験者など国際交流に関心のある日本人学生や、有志の留学生がメンバーとして活動しています。2007年6月から準備会を計8回開催し、同年10月1日に本格始動しました。



KITICO設立の経緯

●橋本 私は博士課程からこの大学に入ったのですが、以前から、せっかくな同じキャンパスに留学生がたくさんいるのに、日本人は日本人同士、留学生は留学生同士の付き合いが中心になっていて、交流が少ないのもったいないな、という思いを持っていました。日本にながら様々な価値観に触れられる機会なのに……。そんな気持ちが通じたのか、去年の六月にKITICOの第一回準備会に参加させていただいて以来、組織の立ち上げやイベント開催に携わることができ、とても充実した毎日を送っています。



▲橋本さん

す。

●島袋 海外旅行をしたときに現地の人と触れ合った経験から、僕は留学生との交流に関心を持っていました。しかし大学の中では、周りの留学生の顔と名前は知っていても、なかなか親しく交流するチャンスに恵まれなかったんです。そうしたいきさつもあった、KITICO設立メンバーとしての活動はすごく楽しくて、誰かのためというよりも、自分自身のためにやっているような気がします。

●張 六年前に学部に入學してから、どうしても中国人の友人とばかり付き合いがちでしたが、本当はもっと日本人の学生や、中国以外の国から来た留学生とも交流したいと思っていました。今回、中国人留学生のグループである「中国人留学生聯誼会」の会長を務めている関係



で、設立メンバーに加わりました。自分が入学した頃にこんな組織があったら……と思う活動を目指して取り組んでいます。

盛り上がりを見せる各種イベント

●橋本 KITICOの最初の大きな行事は昨年十月の「新入生オリエンテーション合宿」でした。留学生が約二十人、日本人チューターが十数人参加し、京丹後キャンパスに宿泊しました。このとき「丹後あじわいの郷」でみんながソーセージづくりにチャレンジしたのはいい思い出ですね。共同作業をすることで、ごく短時間で打ち解けることができ、参加者全員がとても仲良くなれました。

●島袋 僕は、合宿所で合気道を実演し



▲新入生オリエンテーション合宿 (2007年10月6-7日)

10月入学の留学生を対象に、KITの京丹後キャンパスで行われた1泊2日の合宿には、日本人チューター学生も参加し、ソーセージ作りやハンコ作りなどの共同作業を通じて交流を深めました。また、防災・防犯学習など、留学生が日本での生活を始めるにあたってのオリエンテーションも行いました。



て見せたら、留学生の人たちがおもしろがって興味を示してくれたのが嬉しかったですね。その後、僕がやっている合気道サークルに四人も入ってくれました。サークル活動を通じて、他の日本人と知り合う機会も増えているようなので、合気道が、彼らに日本に馴染んでもらういいきっかけになったと思っています。

●張 オリエンテーションに参加したことによって、他の国の留学生や、日本人



▲KITICO杯 (2007年11月11日)

KITの体育館で、留学生・日本人学生がフットサル・バドミントン・卓球のゲームを楽しみました。また、KITの農場で収穫されたサツマイモが焼き芋になって振舞われました。フットサル優勝チームにはお手製KITICOカップ(マグカップ)が贈呈されたとか。



のチューターの方々とコミュニケーションをとれたのがよかったと思います。みんなでワイワイ話しながらソーセージをつくれて、本当に楽しかったですね。

●島袋 十一月に企画したスポーツ大会には、当日五十人以上の学生が集まり、びっくりしました。フットサルをやるとき、その場でチーム分けしたんですが、どのチームもメンバーの国籍がバラバラでありながら、みんなが丸となってプレーして、試合はすごく白熱しましたね。

●橋本 あのとときは、大学の農場で採れたサツマイモでつくった焼き芋を、参加者にふるまいました。喉につまりやすく、スポーツの後の食べ物としては不向きでしたが(笑)、サツマイモを知らない留学生もいて、珍しがっていたのが印象的でした。昨年末に開催した「行く年・来る年もちつきと世界の料理」というイベントでは、各国の留学生が母国の料理やデザートをつくって持ち寄り、テーブルが国際色豊かに彩られました。

●島袋 僕ら日本人学生は、餅つきを担当しました。実は、餅つきの経験者はありません。餅が日本人だ」というふりをして(笑)、張り切ってやりましたね。お餅以外には日本蕎麦もつくりました。



▲島袋さん

●張 中国チームは水餃子でした。毎年学園祭で、中国人留学生聯誼会が水餃子の店を出しているの、水餃子づくりは初めてではありませんでしたが、自分で水餃子をつくれるようになったのは、実は日本に来てからなんです(笑)。

活動の成果と今後の展望

●橋本 留学生と日本人学生と一緒にキャンパスの中を楽しそうに話しながら歩いているのを見ると、それなりの成果があったのかなと嬉しく思います。これまでのKITICOの活動を通して、食を共にしたり、何らかの共同作業の中でコミュニケーションを図ることで、気持ちを共有できるということを改めて実感しました。色々なバックグラウンドをもった人たちと交流をもつことで、確実に視野も広まります。自分の母校が、学生を育む素地を持った大学であれば、それは誇らしいことです。今後もこれまでKITICOが行ってきたイベントをさらに改善し、パワーアップさせて継続させていきたいですね。

●島袋 KITICOのメンバーとして活動するようになってから、毎日キャンパスで留学生の友人に声をかけられるようになり、僕の学生生活は大きく様変わりしました。僕たち設立メンバーが卒業した後も、現在のような活発な交流が続くように、今後は後継者を育成しなければと考えています。

●張 僕はもともと、積極的に人に声をかけるタイプではありませんでしたが、この活動に参加したことで、日本人学生



▲行く年・来る年 もちつきと世界の料理 (2007年12月26日)

【年越し】をテーマに、大学生協食堂アルスで開催されました。日本の年末の風物詩であるもちつきに留学生も日本人学生も果敢に挑戦し、おいしい餅が揚がりました。また、中国・イタリア・韓国・ベトナム・ロシア・フィリピン・フランスの留学生の手によるバラエティに富んだ各国料理を100名を越す来場者が楽しみ、国籍を問わず交流が深まりました。



▲張さん

はもとより、中国人以外の留学生とも親しく交流できるようになりました。友達がたくさん増え、日々の生活がとても充実しています。

エジプトのヘルワン大学と国際交流協定

2008年1月23日にエジプトのヘルワン大学と学術協力協定の締結及び研究者交流覚書の交換を行いました(写真右頁)。ヘルワン大学で行われた調印式には、ヘルワン大学からアブドラ・バラカト学長をはじめ、各学部長他が出席され、本学からは当地で行われたセミナーの参加に併せ、江島学長、功刀副学長らが出席しました。ヘルワン大学は天然素材供給に特色のあるエジプトにあり、本学は今後、環境負荷が低減される新しい繊維素材に関して共同での研究・開発を目指しています。

協定締結に先立ち、2007年10月にはエジプト高等教育省のヘラル・ハニー大臣と本学学長が懇談したり(写真左頁)、在日エジプト大使館の協力によりエジプト文化を紹介する「エジプトデー」を本学で開催したりするなど、エジプトとの活発な交流が始まっています。



次世代型繊維科学をテーマに海外から研究者が集結

日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業に採択された「次世代型繊維科学研究ネオ・ファイバーテクノロジーの学術基盤形成」の一環として、2007年10月24日～25日に本学で第1回セミナーを(写真右頁)、2008年1月21日～25日にエジプトのヘルワン大学で第2回セミナーを(写真左頁)開催しました。このセミナーは本学の繊維科学センターが中心となって、参加国の大学との共同研究や大学間の連携の強化を図ることを目的としたもので、参加した日本、中国、韓国、ベトナム、エジプトなどの研究者が、繊維分野における環境負荷の低減と高付加価値の新機能繊維の創生を目指して2007年4月にスタートさせた共同研究の、動向及び今後の展開について意見交換を行いました。



視聴覚障がい者用体重計などをプレゼントしました

東京大学先端科学技術研究センターの福島智准教授に、視聴覚障がい者用の体重計、目覚まし時計、タイマーをプレゼントしました。

これは、2007年5月に開催した本学創立記念日事業の特別講演会「ユニバーサルコミュニケーション～一緒に泣いたり笑ったり、生きるって何だろう～」で福島准教授が講演された際(写真右頁)、目や耳の不自由な方のための目覚まし時計や、体重計等が製造中止になって困っていることを江島学長が聞き、これらを本学で試作してプレゼントすることを約束したもので、このほど完成したため竹永副学長がお届けしました。福島准教授は待ちかねたように体重を測るなど感触を確かめ、出来映えに満足していただいたようでした(写真左頁)。

これを機に、本学では、福島研究室及び民間企業と共同して、点字同時通訳デバイスの開発に取り組むことを予定しています。



◆◆◆◆◆ 国際学術交流クラブ中国連絡事務所の名称変更のお知らせ ◆◆◆◆◆

新 上海久源軟件有限公司

旧 上海南大蘇富特信息技術有限公司

▶ 国際学術交流クラブについて

このクラブは、本学の卒業及び在学外国人留学生、元・現国際訪問研究員、学術交流協定校の教職員など多くの方々により組織されている世界的なネットワークで、本学が国際社会の学術的な発展と科学技術の振興に貢献するための一翼を担うことを目的としています。

入会のお申し込み等についての詳細は本学のホームページをご覧ください。

http://www.kit.ac.jp/07/07_070000.html

▶ ご意見・ご感想をお寄せください!

KIT インターナショナルジャーナルをお読みいただきありがとうございます。皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。

⇒ e-mail: ab7128@jim.kit.ac.jp

▶ 国際企画課

国際企画課は、国際交流センターに関するすべての事務を担当しております。皆様からのご連絡を課員一同お待ちしております。

▶ 表紙提供

応用生物学専攻 キム・ジョンゴクさん
釜山大学(韓国)からの研究生(2007.11～2008.1)

